

平和と憲法

姫路市 崎津舞香

8月に入ると広島や長崎の様子をテレビなどで目にする事が増え、我が家でも戦争の話題が多くなります。

祖父は第2次世界大戦の折、小学生だったので戦場へは行っていませんが、疎開という形で戦争を経験しています。食物がなく、草の新芽まで食べなんとか生きのびましたが、終戦を迎えても祖父のもとへは両親をはじめ、身内が誰一人迎えに来なかったそうです。その上、兄弟もバラバラになり、未だ音信不通のままです。祖父の父は、陸軍総隊長だったので、戦争犯罪人となり、生きて帰ってきた事を批判され、それを苦に自ら命を絶ったため祖父の生活は悲惨だったそうです。

祖母は海岸沿いに住んでいたのもので水平線に重々しい軍艦が何艘も並ぶ姿に身を隠し、灯火管制のもと暗がりでも怯えながら日々を送っていた事や家の窓から見える校庭に負傷した軍人達が血まみれになって横たわる姿を目の当たりにし、今でもその光景が目に焼き付いていると8月15日を迎えるたびに語っています。

日本は、日本国憲法のおかげで約60年間戦争を経験していません。これは本当にありがたい事です。他国では一時停戦とはいえ戦争は続いていて、無関係な人々が大量犠牲となっています。一度戦争をすれば平和を取り戻すのに膨大な時間がかかります。現在の日本の平和も戦争の記憶によって成り立っています。しかし、戦争体験を持つ世代が少なくなり記憶を語る人々の減少に加え、次世代の関心が薄れる傾向にあると心配されています。また、終戦から62年経っても未だ近隣諸国との間にある領土、拉致問題の解決は難しい様に思われ私の心にかすかな不安が宿っています。

20年後、30年後の世の中を造るのは今の私達子供です。平和の尊さを維持するため、間違った考えを持った人間を育てないためにも戦争の記憶を風化させぬ様、語り継ぐ努力をするのはもちろんの事、日本国憲法の重みを理解する事が大切だと思います。また、祖父母の様に戦争で負傷したり、被爆したりと目に見えた傷はないものの、心に負った傷の様に目に見えない痛みにも目を向け、向き合った時こそ本当の意味で平和が訪れるのではないのでしょうか。そして、私は、今の自分たちの環境に感謝し、その幸福を他の人や社会に貢献できる人になれる様、行動しようと思いました。全ての世界で戦争がなくなり、平和が訪れる事を願って。